

明治期英語教授指導者の教育思想

—岡倉由三郎と神田乃武—

西原雅博*

Meiji Authorities' Views of English Teaching

—Yoshisaburō Okakura and Naibu Kanda—

NISHIHARA Masahiro*

Yoshisaburō Okakura's and Naibu Kanda's views of English teaching are examined and compared, below. Their impacts on the historical development of Japan's English teaching during the Meiji Period cannot be overestimated in terms of their working close to and as policy-makers, and of being strong advocates for practitioners. Both Okakura and Kanda looked at the 'Natural Method' as a crucial source of information in order to transform Japan's traditional foreign language teaching. As it turned out, each had designed a totally different system of the way English should be taught. While Kanda valued the cultivation of modern individuals, Okakura used English teaching as a means of educating the 'Japanese Spirit', which eventually dominated as Japan's distinctive features in English teaching.

明治期 教育政策 英語教育 近代教育思想 「ナチュラル・メソッド」

1. はじめに

岡倉由三郎と神田乃武の二人は、明治期における英語教授法の近代化と制度化に深く関与し、今日の英語教授理論の嚆矢を築いた人物である。彼らはともに近代教育思想を源流とする「ナチュラル・メソッド」の摂取を近代化の鍵とみなしたにも関わらず、互いに異質な英語教育思想を築いた。岡倉は英語教育を臣民教育の枠組みで構想したのに対し、神田は近代教育思想の直接的摂取に努力するのである。その結果、教育政策の表舞台に立ったのは岡倉の方であった。本稿では、両者の教育思想の比較検証を通して我が国の英語教育実践の特質を明らかにし、現代教育への示唆を考える。

2. 岡倉由三郎の英語教育思想

岡倉由三郎（1868－1936）は中等教員養成の総

* 国際ビジネス学科

e-mail: nisihara@nc-toyama.ac.jp

本山東京高等師範学校の英語科主任としてよく知られるが、それ以上に多様な顔を持った明治期の学者、教育者であった。岡倉は東京帝国大学で B. H. チェンバレンから比較博言学（言語学）を学んだ後、アイヌ語と朝鮮語の研究者となる。後に日本語学へと進み、さらに音声学の研究へ転じた。この間、岡倉は植民地朝鮮に新設された日本語学校の校長を2年間務めている。彼が初めて英語を教えるのは、朝鮮から帰国した明治26（1893）年以降のことである。最初の勤務地は国学院中学、城北中学で、明治27（1894）年以降は東京府尋常中学校、鹿児島高等中学造士館、明治29（1896）年から東京高等師範学校で英語を教えた。しかし、この間も国語と朝鮮語の研究は継続している。岡倉が英語教授の近代化・制度化に専念し深く関与するようになるのは、明治35（1902）年から3年間英語教授法研究の文部省留学生としてドイツ、イギリス等へ派遣されてからのことである。帰国後は日本文化を西洋に紹介する『The Japanese Spirit』、自らの英語教授理論の集大成『英語教育』

を書く。さらに、英文学への関心は生涯を通じて継続した。岡倉の英語教授理論は言語学、国語学、英文学といった関連科学に支えられたものである。

2. 1 「日本精神」涵養のための英語教育

教育思想家岡倉由三郎が構想した言語教授理論についてはすでに様々な角度から研究がなされているが、これらに共通する岡倉観は、国粹主義者であり、同時に帝国主義者としてのそれである。

第一に、日本文化論者としての岡倉は、天皇に対する絶対的信仰、神道の神髄こそが「日本精神」であるとし、儒教や仏教等外国宗教に対するその優位性を主張する⁽¹⁾。他方、岡倉は欧米の先進文化や思想・知識の摂取を積極的に認める。それは「歴史的に外来の影響がそれ [=日本文化] を強固にし、豊かにしてきた」とする岡倉の国家観と「永久不変の<日本精神>への確信」⁽²⁾に基いていたからであった。しかし、無限定な外来文化摂取を認めたわけではなかった。彼は述べる。「日本の臣民の偉なる処は、先進の大国の大文化に接するごとに、洋の東西の別なく、極めて公平な態度で之に対し、そのよき処を採って己が短を補ふことを、国民としての自尊心を失ふことなく行ってきた」⁽³⁾。「そのよき処を採って己が短を補ふ」という「採長補短」の態度こそが、天皇制へと連絡する日本精神とそれを拒絶することもありうる外国思想が、岡倉において矛盾なく同居できたのである。

第二に、言語学者、英文学者としての岡倉は「東洋比較言語学」を構想した。そこでは、日本語が近代西洋言語学に対する英語の優位性と重ねられて、近隣アジア諸国語における優位性が付与されている。アジアの諸言語と比較しそれらを蔑視することにより、岡倉は日本を「一等国」イギリスと対等の国に見立てることに成功するのである⁽⁴⁾。

最後に、外国思想の「採長補短」とイギリスを模倣の対象と捉えた英語教育者岡倉が作った中学校英語教科書が、『The Globe Readers』である。すなわち、「大英帝国」の偉大さを深く印象づける

ような内容」⁽⁵⁾と総括されるこの『The Globe Readers』を通じて、‘he [= Okakura] hoped that others would learn about the power of Great Britain for the purpose of furthering their appreciation of Japanese imperialism … (中略) to study the culture of Great Britain is to develop the Japanese spirit. In other words, by strengthening their appreciation of imperialism he hoped to develop a stronger sense of nationalism in Japan’⁽⁶⁾。イギリス文化摂取による帝国主義の発展とナショナリズムの高揚、これが岡倉の目指した英語教育思想とされている。

以上、岡倉の英語教育思想は西洋文化、特にイギリス文化の摂取を通じた日本帝国主義の発展、日本語の優位性、「日本精神」の涵養を目指すものであった。岡倉は、外国文化一切の拒否と自文化の模倣・強化を唱道するナショナリストとは異なり、英語教授の必要性を唱え外国文化にも目を向ける、いわばインターナショナルな帝国主義者であった。我々はこの点に注意しておきたい。

2. 2 「国家の利益」の優位

それでは、英語教育を通じての「日本精神」の陶冶はいかにして実現されるというのか。よく知られた岡倉の著書『英語教育』の第四章には、「教授法の過重視を難ず」という興味深い一章がある。そこには、教育における「国家の利益」と「個人の発達」の関係が説明されている。まず岡倉は、昔の教育主義のように国家の利益のみを考えて個人の利益を眼中に置かないというのは不当であるが、個人の完全な発達のみで国家の利益を問わないのも誤りという認識を示した上で、次のように慎重に述べる。「要は国家と云ふ団体を背景として、個人は是と調和を保ち乍ら其発達を完全ならしむべきである」⁽⁷⁾。個人の発達には国家の利益からは自由ではあり得ないとされている。個人教育はあくまで国家利益に従属する、これが岡倉の国民教育としての英語教育思想であった。

2. 2 (1) 「教授法」への危険視

『英語教育』の第一章の「緒言」において、岡倉は「教育学でも教授法でも、其大部分は常識の産物で、殊に教授法の如きは全然然りと思ふ」⁽⁸⁾として、この本が説く英語の「教授法」についても過去の先輩達が経験したものを土台にした「常識」の賜物にすぎないと力説する。しかし昨今の教育学者たちが専門用語を振り回すから、一般人は「専門的のもの、入り易からざるものとして遠ざける傾向がある」が、「教授法」にはけっしてそのような「神秘的の点は無い」⁽⁹⁾と前置きする。

第四章「教授法過重視を難ず」は、この「諸言」と呼応したものとして読むことができる。まず岡倉は、教育改良の議論となるとすぐに「教授法」の改良に躍起になる英語教師たちの教授法万能主義を非難して、むしろ「教授法」過重視こそが生徒の不出来の原因だとする論を展開するのである。すなわち、「生徒の心身状態を顧慮すること深きに失し、無理をさせまい苦しませまいと努めたる結果、所謂生徒の心身状態に阿ねる弊に陥り、生徒は何時の間にか、難を厭うて易に就くの習慣を養ひ、自ら奮勉学修するの気力を失ひ、徒に教師にのみ依頼する」⁽¹⁰⁾習慣を作ったのだと。

第四章を読み進むと、岡倉の「教授法」批判の矛先が西洋における近代教授学の発展史における教育価値に向けられていることがわかる。岡倉によれば、洋の東西を問はず、従来教育の問題とは単に教育内容の問題である、つまり教育とは国家が用意した内容を学ぶ者の頭に移し込むことを意味し、学ぶ側には何の注意も払はないものであった、しかし「文芸復興と云ふ時代が来て、次第に、自由平等の説が主張せられる様になって以来、在来の団体独尊の主義は、漸次勢を失し、団体の利益を重んずると共に、個人をも大に尊重せねばならぬと云ふことになった。此に於て、従来個人は全く国家に従属せるものとして一瞥をだに与へられなかったものが、今では国家は個人の集合体で、

個人は即ち国家を形成する基礎であるとして個人性の発達を甚だ重要視するに至った」⁽¹¹⁾。

「自由平等の説」の登場にともなって、「団体の利益」に対する「個人の発達」の優位が、西洋における教育主義変遷の背景にあることを岡倉は自覚していた。その結果、「然るに此主義が一転して、学ばせる物は第二で学ぶ人を主とすることとなってから、個人の心的状態を研究し、之に応じて教授を施し、出来るだけ個人個人の性格を円満に発達せしめるのが大切となるに連れ、教授法と云ふものが段々重要なる題目となって来た」⁽¹²⁾。岡倉は個人の教育という価値が「教授法」に込められていることを知っていた。「教授法」は、この新しい人間像教育の実現と不可分の関係にあるということである。これが「合自然の教育学」を源流とする「教授法」なのであり、その系譜上に「ナチュラル・メソッド」があった。

岡倉が「教授法」の過重視を非難する理由は今や明らかである。「教授法」を実践すればするほど、「個人の発達」の教育を実践することになるのであり、逆に「国家の利益」の教育を否定することになるのである。このことに気づいた岡倉には、「ナチュラル・メソッド」の基本原理である「音声第一主義 (speech primacy)」が危険な方法原理と映った。だから、「ナチュラル・メソッド」の研究と摂取に熱を入れる日本の学者や教師を警戒する必要が生じたのである。岡倉にとって、「教授法」のすべてを「採長補短」の対象にすることはできなかった。この結果、岡倉は「音声第一主義」に込められた教育価値を迂回して国体の教育へ終着する新たなロジックを考案することが必要となったのである。

2. 2 (2) 「読解力」への限定

岡倉は、「教授法」に込められた教育価値の危険性を自覚していたにもかかわらず、「教授法」による英語教授法の制度化再編の必要性を自著や講演を通じていたるところで唱導しているのである。

「教授法」の摂取と「日本精神」の涵養は、岡倉においてどのように共存し得るのか。

岡倉はまず、(旧制)中学校教育の目的を限定するところから説明を試みる。すなわち、中学校の目的は実業社会が要求する具体的な知識や技能の習得にあってはならないという。では、どのような性格の学力が目標たるべきなのか。岡倉はこう述べる。「中学で学んだ既得の力を活用することに努力せしめ、其努力によって種々な方面に働き得る様にする事が即ちそれである」⁽¹³⁾。中学校で与えるべき学力とは、社会の「種々な方面に働き得る」基本的な能力、実業社会の要請に対応した個別具体的な知識技能の類ではなく、これよりもっと基礎的で応用の源泉となるような学力であった。この意味で、一部の人々しか必要としない英会話や英作文は、中学校英語の目標としては適当ではないとして排除するのである。

では、中学校の英語教授における「種々な方面に働き得る」学力とはどのようなものか。岡倉によれば、これには2種類の学力があるという。「教育的価値」と「実用的価値」である。「教育的価値」とは、外国の「風物」の摂取を通じて「見聞を広めて固陋の見を打破し、外国に対する偏見を徹すると共に、自国に対する誇大の迷想を除き、人類は世界の各処に同価の働を為し居ることを知らしむるが如き」⁽¹⁴⁾ (下線は筆者)もの、及び、「言語上の材料、即、語句の構造、配置、文の連絡、段落等を究めて精察、帰納、分類、応用等の機能を練磨し、且つ、従来得たる思想発表の形式即、母国語の外に更に思想発表の一形式を知り得て、精神作用を敏活強大ならしむるが如き」⁽¹⁵⁾のものであった。文化の相対的把握、及び、科学的論理的思考力といった、いわば形式陶冶が自覚されている。

学習者の態度や思想の変容を目的とする、この「教育的価値」は他の学科目によっても達成可能である。そこに、英語科固有の責務である第二の「実用的価値」が存在するという。すなわち、「英

語を媒介として種々の知識感情を摂取すること…

(中略) 欧米の新鮮にして健全な思想の潮流を汲んで我国民の脳裏に灌ぎ、二者相助けて一種の活動素を養ふこと」⁽¹⁶⁾ (下線は筆者)であった。このように、岡倉において英語の実用性とは読解力の養成に限定されていた。読解力としての「実用的価値」の実現によって、第一の「教育的価値」が結果として達成される。岡倉の英語教育思想における「種々な方面に働き得る」学力体系とは、「欧米」に矮小化された「人類」理解、思考力の育成、そして、これらを可能にする英語の読解力という構造から成立していた。外国の「風物」摂取という極めて合目的的で限定的な目的観に、岡倉の目標設定の特徴が見られる。

2. 2 (3) 「音声第一主義」と読解力

中学校英語の目標が読解力と定位されるとき、「ナチュラル・メソッド」の方法原理である「音声」は如何なる意義を与えられたのか。発音や会話と読解力との間にはいかなる関係が付与されたのであろうか。岡倉によれば、音声は読解力の実現に必要な不可欠の条件だとされている。いはく、「言語は元来耳に聴いて了解せらるべきもので、目に抛るのは、畢竟一種第二位の手段に外ならぬ」、したがって「読書は他人の言語を耳で聴き乍ら了解する手順を便宜上目を借りて行ふのである」⁽¹⁷⁾。ここには、「音声第一主義」の言語観に立った、聴解力は読解力の前提という関係性が付与されている。ここから、「目にての了解の敏速は根本的なる耳にての了解の敏速に基く」⁽¹⁸⁾となり、読解の速度と正確さの獲得には聴解と話すことの速度と正確さが前提という教授原理が演繹されるのである。

岡倉は、この方法原理に基づいて次のような教育実践を構想した。中学初学年から第3学年までは教授の中心を聴くことと話すことといった音声に焦点化し、後の読解力の基礎を作る。第4、5学年に進み教授の重点は読解力へと移行すると同時

に、その他の分科は読解の速度と正確さを促進する従属的手段として継続的に教授される⁽¹⁹⁾。読解力を第一義的目的とした岡倉において、書くことは特に重視されていない。岡倉にとっての「音声」はあくまでも文字言語のうちの読解力へと連続するものであって、文字言語による発信という回路を持たない、極めて特徴的なものであった。

2. 2 (4) イギリス「風物」の摂取

ここまで、岡倉は読解力を通じて「日本精神」の涵養を達成しようとしたことを述べてきた。彼にとってもう一つの重要な要件は、読解の内容として取り上げたイギリス「風物」であり、これをいかにして生徒に与えるのかであった。これを検討するには、岡倉が「自己の理想を実現すべく編集した教科書」⁽²⁰⁾である『The Globe Readers (Books 1-5)』(明治40年)の分析が不可欠である。まず、この教科書の題材を概観しよう。Book 1(中学1年生用)では、イギリス人少年ヘンリーと彼の家族を中心にストーリーが展開する。ヘンリーの学校生活や家庭での休日、誕生日の慣行等が紹介される。Book 2(2年生用)ではイギリス田園の四季が春から順に紹介されている。地元住民の暮らしを写した大きな挿絵が季節ごとに挿入されているのが目を引く。Book 3(3年生用)は、日本に留学中で母国の学校を終えるためにイギリスに一時帰国するもう一人のイギリス人少年ジェームズの物語であり、帰路の船上で出会う様々な文化背景を持つ人々との交流が描かれている。Book 4(4年生用)では、近代都市ロンドンに到着したジェームズの体験を基にイギリス国内の話題が展開する。Book 5(5年生用)では、舞台がイギリスを越えてアメリカ、カナダ、オーストラリア、アフリカといった植民地を含む他の英語圏文化へと広がる。

さて、この『Globe Readers』の編成原理について二つの特質をみとめることができる。第一は、題材の選択の構造に関する特質であり、それは全5巻を通じてイギリス「風物」が一貫して選ばれて

いる点である。こうした題材選択の方法は、明治期に書かれた他の英語教科書にはないものである。江利川・小篠(2004)では、「題材としては、各巻の構成からしても、イギリス中心、欧米偏重にならざるを得ない。それは、マイナス面であるが、…(中略)岡倉に言う「風物教授」即ち文化教授に適した多彩な読み物を組み合わせている」⁽²¹⁾と

『The Globe Readers』のイギリス偏重を指摘した上で、これを「マイナス面」と評価している。しかし、先述したように題材のイギリス「風物」への傾斜は「日本精神」涵養のために意図的に選ばれた題材であり、岡倉にとっては「プラス面」だったはずである。事実、日本に関する記述を丁寧に読むと、イギリス文化に劣るものというよりむしろ対等の関係で扱われていることに気づくのである。例えば、Book 3. Lesson 1: *A Letter from Japan I*で岡倉はジェームズに‘the land of the Rising Sun’と日本を呼ばせ、日本での生活の印象を‘True to say, Japan has been my second father-land, where I have spent such a number of happy years among its beautiful scenery and my native friends. My present idea, therefore, is to come back here again, as soon as I have taken a degree, either at Oxford or Cambridge, to serve as a teacher under the Japanese government.’⁽²²⁾と語らせる箇所がそれである。先に述べた、岡倉の「東洋比較言語学」的発想をここに重ねることが出来るのであり、これ故にイギリス「風物」摂取を通じて日本帝国主義を教育する教科書となっている。

第二に、題材の配列構造においても特徴を見出すことができる。まず、『The Globe Readers』の全5冊はBook 1から5までストーリーが関連しながら展開するという構造を持っている。先に全巻を概観したように、イギリス人の身近な直接経験に始まった題材は徐々に現在から過去へ、さらにイギリスと日本以外の英語圏や植民地へと関連性を維持しながらストーリーが展開するのである。つまり、イギリス「風物」を通じた「日本精神」涵

養という全体主題を中心に、各巻が相互につながるのがある主題を持つという教材配列の構造である。

さらに、各巻が主題を持つことによって、巻の内部においても各課の間に同様の関連性が付与されるという構造を見出すことができる。例えば、Book 1 ではイギリス国民の最小単位である「個人」と「家族」の紹介を主題として、ヘンリーという個人及び彼の家族・親類に関する内容が各課を構成するのであり、Book 4 ではイギリス「風物」の現在と歴史といった主題の中で 38 の課が配列されるという具合である。以上、巻と巻、課と課における主題を媒介した関連性は、時間的空間的拡大を伴ってストーリーを展開させていくという配列構造を指摘することができるのである。

『The Globe Readers』のこうした教材編成の原理—イギリス「風物」を内容とした教材の選択と配列の原理、及び、各教材相互の結合の原理—が、ドイツのヘルバルト派教授学、特にツィラーとラインによるドイツ国民教育の教授原理として発達した「文化史的段階」、及び、「中心統合法」に基づくものであることに気づくことができる。「文化史的段階」とは民族文化を所与の価値基準として教育内容を決定する理念であり、これは教材の選択と配列に関わる考え方である。「中心統合法」とは各教材相互の結合に関する原理である。「中心統合法」は多様な教育内容を断片的な知識の教授としてではなく、統一的なまとまりとして教授する志向を有し、本来生徒に知識の主体化を求める志向に基づいた教材結合の理念である。言い換えるならば、「中心統合法」は学習者の自我を軸にして捉えた教材配列の原理であり、学習主体の形成を志向する教授原理である。ところが、ラインの国民教育教授学においては、主として「心情」の陶冶、具体的には国家との同化意識の陶冶のための教材統合理念となっている。以上二つの理念は、教材の取扱に関する理念である「五段階教授法」とともに、ドイツ国民教育の三大理念であった⁽²³⁾。

以上、岡倉由三郎の英語教育思想を検討した。

「教授法」に込められた近代教育思想は、認識主体の形成を志向する教育思想である。岡倉の英語教育思想は、「教授法」によって「日本精神」という民族文化の教育を志向するという教育思想上の屈折を特徴としている。近代教育思想が希求する近代的市民倫理の教育が、前近代的共同体倫理の陶冶へと退化しているのである。

3. 神田乃武の英語教育思想

神田乃武（1857—1923）が明治期英語教授界を引導するのは岡倉より早かった。東京外国語学校、東京高等商業学校で英語を教え、正則予備校の校長を 34 年間務めた教育実践家であり、また数多くの英語教科書を編纂し、文部省教員検定試験委員として英語教員の養成にも長く関わった。岡倉の多面的な経歴とは対照的に、神田は常に英語教授の現場に身をおき、我が国の英語教授の近代化・制度化に尽力した人物である。しかし、明治期終盤、彼は英語教授の前線から退き、代わって岡倉が前面に出ようになるのである。

神田の足跡を詳しく辿った小沢・溝淵（1965）によれば、神田は 14 歳から 22 歳までの多感な青年期をアメリカ合衆国で過ごすという稀有な経歴を持つ。その間、彼はアムハースト・ハイスクールで英語、ラテン語、ギリシャ語、博物学を学び、そこで英作文と発音法に深い関心を示した。さらに紳士の養成をモットーとするアムハースト・カレッジに進学し、フランス語、ドイツ語、自然科学、社会科学といった近代科学の勉強を一層貪欲に学んだ。この大学在学中に聴いた思想家であり詩人の R. W. エマーソンによる講演“The Superlative or Mental Temperance”（「最上級か精神的抑制か」）に多大の感銘を受けている。カレッジを卒業するころには、宗教界へ身を投じたいとする一時の思いから、教育を志すという考えに変わっていたといわれている。そのため、神田は卒業か

ら帰国までの数ヶ月間をマサチューセッツ州ウェストフィールド州立師範学校に学び、教育問題について研究した。そこで神田は、「かつて見た中で最もすぐれたソクラテス問答法教授法」に出会うことになるのである。明治初年我が国に移入され、東京師範学校で教授されたペスタロッチーの「事物教授」の方法原理に基づく「開発主義」教授法のことである。アメリカの「合自然の教育学」の洗礼を強く受けた神田は、日本教育への貢献を期して約八年間のアメリカ生活を終えた。帰国した時には、英語がほぼ母国語のようになっていたとも言われている⁽²⁴⁾。

3. 1 模倣による習慣形成

神田乃武の英語教授理論や英語教育思想の形成に決定的な影響を与えた出来事がある。それは神田がアムハースト・カレッジ在学中の明治10(1887)年、ボストンのThe School of Modern Languages(近代語学校)でのDr. L. Sauveurによる‘method naturelle’(「会話による語学教育」と神田は呼んだ)との出会いである⁽²⁵⁾。Sauveurはペスタロッチーの弟子の一人だったドイツ人語学教師G. Henessから「ナチュラル・メソッド」を学んだ人物であり、「事物教授」による語学教授を特徴としていた⁽²⁶⁾。‘method naturelle’も「ナチュラル・メソッド」の系譜に立つ方法であり、神田はこれこそが最善の英語教授法だという確信を持ったといわれる⁽²⁷⁾。神田が寄せる「ナチュラル・メソッド」への信頼は、明治34(1901)年に文部省留学生として欧州の近代語教授法改革を見た際に、「一層この教授法のすぐれていることを再確認し、帰国後はこの視察の成果によってわが英学界に大いに寄与したいと希った」⁽²⁸⁾と、さらに揺るぎないものになった。以上、神田の英語教育思想の構築には、岡倉と同様に「ナチュラル・メソッド」の思想が大きく影響を与えていた点を確認した。

それでは、神田の教育思想は岡倉のそれとどのように異なるのか。まず、神田の英語教授目的論

をみよう。神田によれば、英語は「世界語」として実用性の最も高い言語だと理解されている。こうした背景には、日清戦争(明治27-28年)後の商工業界における物質的繁栄への期待があり、英語はこれに貢献する言語であるとみただけである。神田曰く、‘She [=Japan] has come forth victorious from the storm of the battle field, only to be plunged into a mightier conflict—the struggle for supremacy in the field of commerce. Not the least of her weapons in this species of warfare is the knowledge of European languages, — especially English, the intellectual currency of the commercial world’⁽²⁹⁾。岡倉は実務社会に対応した目的論を否定したが、神田はむしろ英語のこうした利便性こそがすべての中学生に与えられるべきだと主張した。

実務を志向する目的観において、神田はいかなる教授理論を構築したのか。まず、神田は日本の英語教授の「欠陥」を3点指摘する。第一に、中学校英語に対して高等学校が要求する高尚すぎる題材と読解力、第二に実用性を省みず訳読に偏重する教師、最後に上記二つの批判の原因である伝統的素読訳読式教授であった。神田曰く、‘In studying Chinese and even Sino-Japanese the genius of the language necessitates the separation of the mere exercise of Reading from Meaning. This produces a bad habit in the mind of regarding the sound separate from the sense’⁽³⁰⁾。素読訳読教授における意味と音読の分断、意味と音声との乖離こそが神田が最も問題視したものであった。

すなわち、神田においては「聴」、「話」、「読」、「書」のすべてが等しく重要とされ、またこれらは統一的に教授すべきとされた。「英語研究ノ目的四アリ曰く読、曰く聴、曰く話、曰く書是ナリ或ハ曰く読以テ足ルト然レモ英語ノ研究ハ単ニ此ノミニ依ルベキモノニアラズ此四者ハ互ニ相貫連シテ箇々別々ニ研究スルヲ得ザルモノナリ」⁽³¹⁾。たとえ読解力だけで間に合うとしても、英語の研究法はそういうことでは決まらぬと宣言している。

その代わりに、神田は四つの言語機能は調和的に発達させなければならないとするのである。この、言語の調和的発達観、言語発達の相互依存性こそが、神田の言語教育思想の真髄であった。

ここから、神田は言語発達過程を「イミテーション」の過程だとする言語発達観を持つことになる。曰く、「之ヲ得ルハ大ニ其熟練如何ニ依ルモノニシテ其法ハ小児ノ場合ノ如ク真似「イミテーション」ノ法ニ依ラザルベカラズ」⁽³²⁾。神田の「ナチュラル・メソッド」理解においては、言語発達過程は模倣による習慣形成過程であった。彼において、「ナチュラル・メソッド」の基本的な方法原理「音声第一主義」は、模倣による習慣形成のための要件という意義を付与されたのである。

模倣による習慣形成という神田の言語発達観は、次のような教授上の方法原理を導いている。すなわち、教師の音読による音声の提供と生徒の模倣活動である。「教師先ヅ短句ヲ発音シテ生徒ヲシテ之ヲ真似シムルナリ教師黑板ニ短句ヲ書シ生徒ヲシテ其控帳ニ其書法ヲ真似シムルナリ教師一文章ヲ通読シ生徒ヲシテ之ヲ書セシムルナリ教師一句ヲ書シ生徒ヲシテ之ヲ読マシムルナリ而シテ後句ヲ分割シテ語トシ…（後略）」⁽³³⁾。ここには、音声と文字・文のモデル提供者としての教師観、それを模倣して習得していく学習者観が描かれている。神田は、これを英語教授・学習の基本的作業だと捉えた。

神田の教授理論は、さらに次のような言語発達過程を展望している。すなわち、教師が「生徒ニ読聞セバ生徒ハ漸クシテ言語ニ馴レ遂ニ翻訳ヲ俟タズシテ全ク其意義ヲ解スルニ至ルベシ」⁽³⁴⁾。教師による音声の継続的な提供は、国語を媒介しない理解を可能にするという展望である。さらに、「生徒ニ読聞セタル後生徒ヲシテ自己ノ語ヲ以テ此ヲ話サシムルハ教科書ヲ英訳スルニ優ル何トナレバ英訳ハ生徒ヲシテ知ラズ識ラズ書中ノ字句ヲ用イシムルノ傾アルニヨル」⁽³⁵⁾。聴き取りをさせ

た後で理解した内容を生徒に口頭で自己表現させるという表現活動を奨励している。こうして、「言語ニ聞慣ルルノ習慣ハ遂ニ適当ノ語ヲ用イテ其思想ヲ発表スルヲ得ルニ至ルナリ」⁽³⁶⁾として、聴き取りは将来の十全な表現力にまで発展するための出発点とされている。文法の教授においても、模倣による「自然な」習得観は一貫している。「文法ハ学ンデ之ヲ得ルヨリモ寧ロ習慣ト模倣トニヨリテ之ヲ得ザルベカラズ」⁽³⁷⁾。こうした模倣と習慣形成において、神田が常々強調したのが学習初期における基礎の徹底した反復練習の必要性であった⁽³⁸⁾。

以上、神田の英語教育思想においては言語機能の調和的相互依存的発達観に基づく模倣による習慣形成という教授理論が導びかれていた。音声から文字へ、理解から表現へ、国語を媒介しない自然で非分析的な教授過程としての方法原理、これが神田のめざした英語教授であった。

3. 2 近代的教育価値

神田も岡倉も近代教育思想を源流とする「ナチュラル・メソッド」に注目し、その方法原理である「音声第一主義」を独自に翻案した教授法を考案した。岡倉においては近代教育思想が希求する近代市民倫理の教育が、「日本精神」という前近代的共同体倫理の陶冶へと屈折させられていた。この点で、神田の英語教育思想に内在する教育価値は異なっていた。彼は、英語教授をリベラルで文化的に中立な枠組みに位置づけ、「日本精神」に必ずしも回帰しない価値、むしろ近代的主体の形成に通じる価値を受け入れていた。

神田はこのことを明示的に語ってはいない。しかし、彼の英語教授理論の解説の中にこれを見出すことは可能である。例えば、生徒に与える英語教科書の選択についての説明がそれである。岡倉の国民教育思想ではイギリス「風物」という特定の文化内容が選り取られていたが、神田では、「一度若ハ一度以上教師ノ読ミタルヲ聞キタル後生徒

ガ自己ノ語ニヨリテ再び其意義ヲ説明スル能ハザル如キ高尚ノ教科書ヲ生徒ニ読マシムルハ決シテ其当ヲ得タルモノニアラザルナリ」⁽³⁹⁾として、選ぶべき文化内容ではなく、題材の読みやすさ・難易度を教材選択の尺度として取り上げている。具体的には、*‘Now, in this plan of teaching, it goes without saying that placing difficult text-books in the hands of the pupils is out of the question. As they advance from the elementary stage, easy histories, biographies, books of travel, &c, books which they can read with interest, should be made the means of their progress in Conversation, Composition and Direct Reading’*⁽⁴⁰⁾。生徒が「興味」を持って読める題材が選択の尺度とされている。この尺度に合う限りにおいて、歴史、自伝、旅行記等、多様なジャンルがその対象となりうるのである。

こうして、生徒の「興味」、生徒の内面に働きかける英語教授によってのみ、真の言語獲得が達成されると神田は考える。上の引用に続けてこれを次のように表現した。*‘The real mastery of idiomatic English can be attained only by this method, and not by tussling with a dictionary. The vocabulary which a student acquires by this method of cultivating the habit of direct reading is truly his own. Thoughts and their symbols are one in his mind’*⁽⁴¹⁾（下線は筆者）。「真に学習者自身のもの」、すなわち、音声と意味が乖離せず「思想と言語がひとつになる」ことが、神田が言語学習に求めた成果であった。ここには、「ナチュラル・メソッド」に本来込められた認識主体の形成が英語教育における教育価値として定位されていることをみとめることができる。

岸上（1983）は神田の功績を「神田がアメリカから持ち帰ったものは、語学ばかりではなく、その精神である英米文化そのものだったと思われる。…（中略）彼は「言語教授」を媒介として、我々に英米文化そのものを伝えようと努力したことだと思う」⁽⁴²⁾と述べているが、この「英米文化」とは「ペスタロッチ主義教育思想とエマーソンの超

絶主義から影響を受けたと思われる自然観、言語観」⁽⁴³⁾のことである。神田の情熱的な英語教授改革は、「ナチュラル・メソッド」への深い信頼に基づいて近代性を直に摂取する努力であった。

明治13（1880）年から明治33（1900）年までの20年間は神田にとって最も華麗活気のあった時期だった⁽⁴⁴⁾。神田の親友であり文明批評家の内村鑑三は、この間にすでに神田の活動にある種のブレーキがかけられたとする文明批評を行なっている。曰く、*‘… the returned students from America were looked at askance, their sphere of activity being considerably narrowed. Mr. Kanda was one of those who suffered from this and if he failed to achieve a greater success in his undertaking than he did, the fault, I am sure, was not entirely his’*⁽⁴⁵⁾。ドイツを模範とした帝国日本において、民主政体の空気に触れていた、神田を初めとするアメリカ留学経験者たちの活動が制限されたと書かれている。内村は続けてこう悔恨している。*‘If Japan had had at that time men of vision who could point out to the people that Germany was not the only country from which we could learn, and that England and America also had much to teach us, and if such men had given a free hand socially to such as Mr. Kanda, I think the Japanese would be better off today than they actually are’*⁽⁴⁶⁾。

その後、神田は文部省留學生の機会を得、帰国後約10年間学習院教授として英語教授を実践する等、活動を継続したが、彼の献身は国家の教育政策による限定を受け続けた。

4. 現代外国語教育への教訓

本稿では、我が国の英語教授の近代化政策期における二人の対照的な英語教育思想を捉えて、それらと教育政策との関連に言及した。外国語教育の目的・価値および教授法は、国家政策の志向によって所与的に選択される性格を持つ。戦後の外国語教育政策は、昭和59（1984）年の臨教審以降、新自由主義に基づく国益追求と技能主義によって

再編され、ビジネスと科学技術分野における「グローバル化」によって動機づけられている。教育の現場では、外部試験の浸透に伴う学習目標の一元化と成果測定の数値主義によって、「英語」という教育対象が平坦な実用主義に矮小化されている。

本研究からの教訓として2点指摘しておきたい。第一は、日本の教育の国際化は国際舞台で活躍する「日本人」をつくるというナショナリズムにおいて遂行されているという屈折である。岡倉も神田もともに外国文化に開かれた教育者であったが、その目的においては全く対照的であった。我が国の国際化はややもすれば岡倉が敷いた帝国主義のレールの上を走ってはいないか。本来、国際教育は誰もがすでに国際社会の一員として生きていることを自覚した地球市民の教育でなければならない。第二に、この国では外国語教育が事実上英語教育とほぼ同義であることである。この現状が日本人に外国語教育が異文化理解、他者理解の重要な機会であるという認識を欠如させている。岡倉の教科書のイギリス偏重を「マイナス面」とした江利川・小篠(2004)の評価は妥当だと思われる。「グローバル化」とは「多様化」のことである。

外国語教育が世界の偏りのない姿を学生に教える魅力的な窓になる必要がある。こうしたオルタナティブなヴィジョンを持つためには、外国語教育を、目的・価値の次元で問い直す努力が大切であることを明治期英語教育史は教えている。

引用文献

- (1) 平田諭治, 岡倉由三郎『ザ・ジャパニーズ・スピリット』考, 英学史論集, 21, 9 (1998)
- (2) 平田諭治, 上掲書, 9 (1998)
- (3) 平田諭治, 前掲書, 9 (1998)
- (4) 齋藤一, 翻案と翻訳—岡倉由三郎について—, 帯大人文社会科学論集, 10 (4), 1-15 (2001)
- (5) ユン・スアン, 帝国日本と英語教育—岡倉由三郎を中心に—, 日本の教育史学, 48, 43 (2005)
- (6) ユン, 上掲論文, 49 (2005)
- (7) 岡倉由三郎, 英語教育, 博文館, 24 (1911)
- (8) 岡倉, 上掲書, 2 (1911)
- (9) 岡倉, 前掲書, 2 (1911)

- (10) 岡倉, 前掲書, 25 (1911)
- (11) 岡倉, 前掲書, 22 (1911)
- (12) 岡倉, 前掲書, 23 (1911)
- (13) 岡倉, 前掲書, 38 (1911)
- (14) 岡倉, 前掲書, 39 (1911)
- (15) 岡倉, 前掲書, 39 (1911)
- (16) 岡倉, 前掲書, 40 (1911)
- (17) 岡倉, 前掲書, 43 (1911)
- (18) 岡倉, 前掲書, 44 (1911)
- (19) 岡倉, 前掲書, 44-45 (1911)
- (20) 高梨健吉・出来成訓, 英語教科書の歴史と解題 (英語教科書名著選集・別巻), 大空社, 231 (2004)
- (21) 江利川春雄・小篠敏明, 英語教科書の歴史的研究, 辞游社, 70 (2004)
- (22) 高梨健吉・出来成訓, 英語教科書名著選集第13巻, 大空社, 1-4 (1993)
- (23) 稲垣忠彦, 明治教授理論史研究, 評論社, 397-422 (1995)
- (24) 小沢明子・溝淵多香子, 神田乃武, 近代文学研究叢書第23巻, 日本女子大学, 22-25 (1965)
- (25) 小沢・溝淵, 上掲書, 23-24
- (26) 定宗数松, 英語教授法概論, 研究社, 29-30 (1936)
- (27) 小沢・溝淵, 前掲書, 23 (1965)
- (28) 小沢・溝淵, 前掲書, 47 (1965)
- (29) 神田乃武, English in Middle Schools, 太陽, 2 (4), 231 (1896)
- (30) 神田, 上掲論文, 232 (1896)
- (31) 神田乃武, 英語学ノ研究, 東洋学芸雑誌, 153, 314 (1894)
- (32) 神田, 上掲論文, 315 (1894)
- (33) 神田, 前掲論文, 315 (1894)
- (34) 神田, 前掲論文, 316 (1894)
- (35) 神田, 前掲論文, 316 (1894)
- (36) 神田, 前掲論文, 317 (1894)
- (37) 神田, 前掲論文, 318 (1894)
- (38) 神田, 前掲論文, 234 (1896)
- (39) 神田, 前掲論文, 316 (1894)
- (40) 神田, 前掲論文, 235 (1896)
- (41) 神田, 前掲論文, 235 (1896)
- (42) 岸上英幹, 英学者神田乃武の教授理論と言語観, 立教大学教育学科研究年報, 27, 68 (1983)
- (43) 岸上, 上掲論文, 68 (1983)
- (44) 高梨健吉・大村喜吉, 神田乃武, 日本の英語教育史, 大修館, 141 (1975)
- (45) Uchimura K, The Late Mr. Baron Naibu Kanda, Memorials of Naibu Kanda, 神田記念事業委員会編, 刀江書院, 75 (1927)
- (46) Uchimura, 上掲書, 75 (1927)